

マタイによる福音書14章22～33節

● イエス様が湖の上を歩いて弟子たちの元に来た奇跡の場面は、マタイ、マルコ、ヨハネの福音書に記されています。これは当時迫害や困難に翻弄されていた教会に主が共にいて下さるといふ信仰を示しています。しかし、これに加えてマタイ福音書だけが、特に印象深いペトロとイエス様とのやりとりを記しています。

ペトロはイエス様に「水の上を歩かせてください」と願い、実際に歩き始めます。しかし、強い風に恐れて沈みかけ、「主よ、助けてください」と叫びます。イエス様はすぐに手を伸ばして救い、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と優しく語りかけました。この話は、「私達も完全な信仰があれば水の上をも歩くことができるのだ」と教えているのではありません。逆に私達は皆、そのような揺るぎない信仰を持ち合わせていないことを示しているのです。そしてマタイが伝えたかったのは、そのような私たちの弱さや苦しみを知り、温かな手を差し伸べ、支えてくださるイエス様がおられるということです。

● アメリカ在住の頃、ウェスレー教会の夏の子どもプログラムで、ペトロが水の上を歩く場面を劇で表現するという機会がありました。私がペトロ役を演じ、「溺れる！」と叫ぶと、打ち合わせもしていないのに、一人の小さな女の子が私に手を差し伸べてくれました。その手は、温かい「愛と共感に満ちた手」だと感じました。

● 明治期のキリスト教思想家・内村鑑三は、30代の時に「さらばわれは何なるか 夜暗くして泣く赤子 光ほしさに泣く赤子 泣くよりほかにことばなし」という言葉を「求安録」に記しました。また、彼は69歳の臨終の床でも「自分は十字架にすぎる赤子にすぎない」と語り、生涯を通じてキリストの十字架にすぎる信仰を告白しました。内村は、信仰によって苦しみや悲しみが消えるとは説かず、人間は弱く無力な存在であり、ただキリストの手にすぎるしかないと教えています。

● 信仰とは、自分の強さを誇るのではなく、むしろ弱さを受け入れ、キリストに助けを求めることなのです。私達もペトロのように「主よ、助けてください」と叫びながら、主が差し伸べてくださる愛の手にすがり続けたいと願います。そして、その愛と共感の御手に深く触れた私達は、他者の弱さにも共感し、イエスの愛をもって手を差し伸べる者でありたいと願います。